



「会創立20周年記念に思う」

名誉会員（第三代会長）
角 田 明

今年は「当会創立20周年」の年であると、片木会長よりお聞き致しました。

誠におめでとう御座います。

当会発足以来の会員であり、幹事などで18年ほどお世話をさせていただきました私にとりましても大変光栄に存じます。

このお祝いに際しての原稿を依頼されましたが、この会の発足母体は日本歯科放射線学会だと思っています。私は、昭和49年（1974年）から大阪大学歯学部附属病院に勤務し、翌年の第16回日本歯科放射線学会総会（1975年・郡山市）に初めて参加致しましたが、参加者のほとんどが歯科医師で、少数の診療放射線技師、物理士がおられたように記憶しています。それ以来私はこの学会に毎年（第50回総会・2009年・大阪市、まで連続34回）欠かさず参加してきました。

初めの頃は、西岡、田中、閑野、・・・各氏のように毎回この学会に参加される特定技師のお方と、年単位でのローテーションで参加される技師方の2つのタイプがありました。特定技師方は2～3年経つとお名前、お顔、所属施設等が分かってくるのですが、ローテーション組のお名前は10年ほど経ってもなかなか認識できない状態が続き、撮影現場の情報交換等はうまく出来ませんでした。

そこで歯科系大学に勤務する診療放射線技師だけの会を創ろうという機運が関東地区を中心として高まり、第28回日本歯科放射線学会総会（1987年・広島市）の開催時に当時の砂屋敷技師長（広島大学）のお世話で、その学会参加者の有志技師だけで集まる懇親会が行われました。次の第29回日本歯科放射線学会総会（1988年・札幌市）では、輪嶋元技師長（現北海道医療大学）のお世話で同様の会が模様され、第30回日本歯科放射線学会総会（1989年・鹿児島市）時に米倉元技師長（鹿児島大学）のお世話で、長年の夢であった全国歯科放射線技師連絡協議会設立総会（東急ホテル内「海らく」にて、21時～23時、18名参加）が開催され、お座敷で食事をしながらだったと思いますが、熱心に討議して規約が決定されました。また、会長西岡敏雄氏（日本大学）、副会長砂屋敷忠氏（広島大学）が選出され、第1回総会を1990年に東京地区で開催することも決められました。写真1は、解散した23時過ぎにホテル前で私が持っていた小型カメラで撮影した集合写真でございます。

その後、私も関西地区の幹事に指名されたため、東京で行われた幹事会に何回か自費で参加しましたが、当時の西岡会長や田中総務は交通費の支給が出来ない事を詫びられていました。

1施設3000円の当時の会費では、通信費等だけでなく予算の目処はなかったのですが、会員の結束力や記録のため何とか会誌を発行しようという執行部の強い執念があり、当時まだ大

半の放射線技師にはパソコンは高嶺の花で、皆様方の原稿等はほとんど手書きでしたので、当時の丸橋幹事（日本大学）がパソコンで活字におこし、その原稿を当時の大坊幹事（奥羽大学）が中心となり手作りで製本したのが、図1の記念すべき第1号会誌の表紙でございます。

会誌の発行で広告料が入る道が開け、第2号誌目からの会誌発行は今のように民間の印刷所に委ねられるようになりました。また幹事会の参加者に交通費が支給される余裕もでき、総会の開催担当校にも補助金が出せるようになり、会の運営が随分楽になりました。

ということで、東京での幹事会で侃侃諤諤の討議が行われた結果、今のようなスタイルになり現在に至っています。広告収入があることで、小生も年に1～2回「安心して」幹事会に呼んでいただけるようになり、当時の田中総務（鶴見大学）からはアイデアマンなどと煽てられながら、試行錯誤のご提案を積極的にさせていただいた記憶がございます。

日本歯科放射線学会を母体にしてゼロからの出発でしたが、当会も何とか軌道にのり西岡初代会長が勇退された後、2代目は田中会長となりました。安定した当会に歯科系大学の範囲を超えての会員増加や、事業のさらなる発展等が課題になりました。しかし会員数は伸び悩みましたが、メーリングリストやホームページの開設や本の出版などの事業が推進されました。

田中会長の体力等の問題で会長を勇退される時を向かえ、14年以上も関東地区で開催されていた幹事会を一度地方に移そうということになり、名古屋、大阪、福岡地区の案がでて、結局大阪地区となり私が3代目の会長に選出されました。

当時世間は国立大学の独法化計画の真っ最中で、また11国立大学の医歯病統合案も真剣に議論されていました。当時「全国私立歯科大学・歯学部附属病院診療放射線技師代表者会」が既に設立されていたので、国立大学の医歯病院統合により11の国立大学歯科技師全員が退会すれば、そこで当会は自然消滅していましたが、結局2003年10月に9大学の歯病が統合したにも関わらず当会が存続出来たのは、会員と幹事会の皆様の熱心な活動と団結力があつたことはいうまでもありませんが、国立大学に所属する角田会長（大阪大学）、加藤副会長（九州大学）、隅田総務（広島大学）、坂野会計（徳島大学）の4役の存在が、「接着剤」として少しは働いたのでなかったかと思っています。結局私は2期4年間勤めさせて頂き、4代目会長片木氏へ無事にバトンタッチできましたことに大変感謝しています。

今振り返りますと、私は25歳で「歯科放射線」という狭い領域で仕事を始め、多数の歯科医師という身分のお方とお付き合いが始まり、初めは全く知らなかった歯科業界に興味深深でした。しかしこの業界では診療放射線技師は少なく寂しい思いをしていましたが、当会を通し全国のユニークな「同業者」と懇意になれ、仕事やプライベートでお付き合いでき毎日の単調になりがちな仕事を35年間も続けられたことは、本当に当会と皆様方のお陰だと感謝しています。当会の創立とその継続は、全国の歯科大学に勤務する現場の技師達を繋げ、20年という歳月でその絆は強固に育ってきたと思います。

これからの10年、20年先も大きな目標を定めて行動するよりも、今まで通り歯科の撮影現場で1～3年先に遭遇するであろう諸問題を取り上げ、その対応を皆様で知恵をだしながら地道に活動することで、自然と各施設の共通化、標準化が行われて伴に診療技術の向上が図られて行く

ものと信じています。

当面の重要なテーマの1つは、大規模施設における口内法デジタル化システムの標準化だと思いますので、これからの皆様方の益々のご活躍にご期待申し上げます。継続は力なり。



写真 1



図 1